

## 平成 30 年度第 3 回立川市生涯学習推進審議会 会議録

開催日時 平成 30 年 9 月 6 日（木曜日） 午後 7 時 05 分～午後 9 時 15 分

開催場所 立川市女性総合センター（AIM）5 階第 2 学習室

出席者 [委 員] 倉持 伸江 会長 榑崎 茂彌 副会長

伊東 静一 委員 梅田 茂之 委員

榑並 隆博 委員 榑本 弘行 委員

佐藤 良子 委員 竹内 英子 委員

難波 敦子 委員 林 勇希 委員

比留間 敏郎 委員 眞壁 繁樹 委員

[事務局] 生涯学習推進センター長 五十嵐 誠

同 管理係長 新藤 博

同 管理係員 鳥野 純一（記）

[説明員] 立川市立第六小学校長 桐井 裕美

### 次第

1. 開会
2. 会長挨拶
3. 協議事項
  - (1) 平成 30 年度第 2 回立川市生涯学習推進審議会 会議録について
  - (2) 諮問に対する答申について
  - (3) 生涯学習施策の進捗評価について
  - (4) 第 6 次生涯学習推進計画策定に関する市民アンケート調査について
4. その他

### 配付資料

1. 平成 30 年度第 2 回立川市生涯学習推進審議会 会議録（案）
2. 平成 30 年度第 2 回立川市生涯学習推進審議会 協議事項（2）諮問に対する答申について 議論の要点まとめ
3. 「まちを知り、まちに愛着をもち、まちに貢献できる まちの担い手の育成」立川市民力を育む立川市民科の具体的展開（第六小学校発表資料）
4. 立川市第 5 次生涯学習推進計画 平成 29 年度取組状況の進捗評価表（案）
5. 教育委員会点検・評価（抜粋）
6. 市民アンケート（案）
7. 生涯学習に関するアンケート集計結果
8. コミュニティ・スクールと地域学校協働本部について（立川市総合教育会議資料）
9. コミュニティ・スクール 2017（文部科学省資料）

## 会議内容

### 1. 開会

### 2. 会長挨拶

(会 長) 皆さんこんばんは。色々な自然災害が起こっていますが、私たちは肅々と立川の生涯学習について意見交換したいと思いますので、よろしくお願いします。

### 3. 協議事項

#### (1)平成30年度第2回立川市生涯学習推進審議会 会議録について

(事務局・管理係長) 資料1をご覧ください。事前に確認をお願いし、修正意見等はありませんでした。会議録は承認後市ホームページで公開いたします。資料2は適宜ご参照ください。

(事務局・センター長) 前回の会議で、コミュニティスクールと地域学校協働本部の事業内容が重なっているのではないかとというようなご意見をいただきました。これについては、コミュニティスクールは学校の運営について考える集団で、そこで考えられた運営方針に従って実際に事業を行う準備をするのが地域学校協働本部のコーディネーターの役割となります。役割分担としては、考える集団と実動部隊ということで棲み分けできています。事業が重なっているということはありませんのでご理解いただければと思います。

それから、進捗評価のところ、28年度評価の評価コメント(シートの内容に適さないと思われる数値が記載されている点を指摘するコメント)が反映されていないのではないかとというようなご質問があったときに、いただいたご意見のすべてを反映していないとも受け取れる発言をしましたが、各シートに関連する事業のデータを記載することとなっているため、29年度評価でもあえて載せているということをご説明させていただいたものですので、補足させていただきます。

(会 長) ご質問等ありますか。会議の終わりまでにお気づきの点等ありましたらご発言ください。(会議終了までに意見等なし)

#### (2) 諮問に対する答申について

(会 長) 前回、立川市における地域学校協働本部についての情報提供をいただき、地域学習館との連携や協働について意見交換しました。本日は、学校教育における「立川市民科」について情報提供いただき、意見交換したいと思います。

(事務局・管理係長) 本日は第六小学校の桐井校長にお越しいただいております。議論に入る前に、「立川市民科」の事例についてご紹介いただけるということで、どうぞよろしくお願いします。

(説明員・第六小学校長) 改めましてこんばんは。第六小学校長の桐井と申します。本校の取り組みを知っていただけるということで大変光栄です。前段は「立川市民科」についてコンパクトにお話しします。その後は、本校の3年生、現4年生が取り組んだ「湯ったり あったか 羽衣プロジェクト」についてご説明します。

まず「立川市民科」についてです。「立川市民科」とは、平成 27 年度より、立川市立の全小中学校で実施されています。目指しているところは「まちに愛着をもち、まちと主体的に関わり、まちに貢献しようとする児童・生徒の育成」という形で、教育長肝煎りで取り組んでいる事業です。義務教育の 9 年間を見通した、小中連携教育の中で、郷土学習とキャリア教育を関連付け、郷土・立川の優れた文化や伝統、産業やまちづくり等を理解し、児童・生徒の郷土やまちを愛する心情や態度を養い、優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献できる市民として育成することを目的とした、立川市独自の取り組みです。本校としては、平成 29 年度より 3 年間、立川市教育委員会教育力向上推進モデル校の指定を受け、「まちを知り、まちに愛着をもち、まちに貢献できる まちの担い手の育成」という形で、立川市民力を育む立川市民科の具体的展開を示していこうということで取り組んでいます。教科は生活科と総合的な学習の時間を中心として行っています。「湯ったり あったか 羽衣プロジェクト」(以下「羽衣プロジェクト」という。)についてご紹介します。羽衣町には銭湯が 2 軒ありますが、以前より少し足を運ぶ方が少なくなっているようです。3 年生は教員も含めて 50 人です。まずは、50 人家族で羽衣町の何を学習しようかということ、総合的な学習の時間で話し合いました。教員から条件を 4 つ出しました。「3 年生みんなで一年間取り組める」「本気になれる」「地域の人と触れ合えて、地域の人のためになる」「繰り返し体験ができる」という形で進めていきました。子どもたちから様々な意見が出た中で「銭湯」にしようとなりました。みんなでお風呂に入りたい、銭湯の良さを羽衣町の人々に伝えたいという思いからプロジェクトがスタートしました。子どもたちは放課後に銭湯に交渉に行きました。交渉は初めてなので大変ドキドキしたようです。授業中にお風呂に入ることなんて無理だろうと思っていましたが、女将さんに OK をもらうことができ、とても嬉しかったということです。総合的な学習ということとカリキュラムマネジメントという形で、算数なども取り入れて勉強しました。銭湯の魅力を六小のみんなに伝えるテレビ番組を作るために、国語の時間に台本を考えました。

銭湯の壁にあった富士山の絵を見て、子どもたちは「この絵は誰が描いたのだろう」と疑問を持ちました。ある日新聞に 82 歳の銭湯絵師の記事があり、富士山の絵は丸山清人さんによるものと分かりました。子どもたちは丸山さんの個展を見に行き、六小に来てほしいとお願いしたところ、六小でライブペインティングをしてくださることになりました。子どもたちが計画し、地域の人々にも宣伝しました。ライブペインティング当日は 80 名超の来場があったほか、マスコミも集まりました。司会進行などすべて子どもたちが行いました。自分たちでやったことが自信に繋がったようです。丸山さんの指導で子どもたちが描いた富士山の絵は、多摩都市モノレール立川南駅に掲示されています。丸山さんの「100 点はない。ものをつくる人間は 100 点をつけたら終わりなんだ」という話が印象に残ったようです。

そして、大好きになった銭湯の魅力を伝える「羽衣銭湯物語」を学芸会で発表することにしました。子どもたちがオリジナルの台本を考えました。

それから、立川で銭湯を営む教育委員の佐伯雅斗さんを招いて銭湯の現状について学びました。子どもたちは自分たちにできないことがないか考え、オリジナルグッズ「湯ったりあったか羽衣手ぬぐい」を製作しました。丸山さんに絵を描いていただき、立川市民科の文字と羽衣プロジェクトの名前も入れています。子どもたちは手ぬぐいの製作に携わってくれた地域の様々な人々に感謝しているようです。手ぬぐいは現在も販売中です。以上です。

(会 長) 当審議会のテーマとしては、学校で取り組んでいる立川市民科と、生涯学習の方でやっている立川市民科の接合点として、地域学習館と学校との連携や協力が図れるかどうかということです。初めて現役の校長先生に話を伺える機会ですので、活発な質疑応答や意見交換が展開できればと考えています。いかがですか。

(委員B) 苦労した点がありますか。

(説明員・第六小学校長) 大きいところでは、商品を作って販売するノウハウが十分なかったのが、色々なところに掛け合ったのですが、実はもっと身近なところできたということが後から分かりました。そのあたりは苦労というか、勉強になりました。あとは地域や保護者は協力的に羽衣プロジェクトに携わってくれました。入浴時は保護者にも見守りを手伝っていただき、怪我や事故もなくできました。あと、校内の事情になりますが、昨年度はモデル校の指定1年目だったので、何をどうやったらよいか、手探りでした。3年生以上は総合的な学習の時間で取り組み、テーマ決めとなったときに、この「羽衣プロジェクト」が進んでいったのですが、他のプロジェクトは十分でないところがあったので、校内でのバランスも整えないといけないと思いました。2年目の今年度はすべて同じバランスで進むようにやっています。

(会 長) すべての学年で、それぞれ別のテーマでやっているのですか。

(説明員・第六小学校長) はい。今年度の3年生は「大豆」というテーマで、近くの豆腐店と連携してやっています。

(会 長) 3年生のときにやるものなのですか。

(説明員・第六小学校長) いえ、3年生以上の学年で、総合的な学習の時間を使ってテーマをもって進めています。1、2年生は、生活科でシルバー人材センターとのコラボレーションを行ったりしています。

(会 長) 全学年が「立川市民科」としてやっているのですか。

(説明員・第六小学校長) そうですね。他の学校も同様にやっています。

(委員H) 先ほどのスライドの中で、宣伝に協力してくれる地域の商店街の方の写真があったと思いますが、どこの商店なら協力してくれるなどの地域情報は、どのように拾ってきたのですか。飛び込みですか。

(説明員・第六小学校長) そうですね。下打ち合わせは青少健などの地域の会合で声掛けはしていますが、子どもが実際に行くのは、子どもが普段お世話になっている商店などです。羽衣町にある学校は一つなので、地域密着型です。自然と違和感なく話が進んでいます。

(委員H) 第六小学校は、地域学校コーディネーターがいると思いますが、うまく活用したということはあるのでしょうか。

(説明員・第六小学校長)月に1回、地域学校協働本部事業のミーティングを開いていて、そこでは発信していますし、コーディネーターの中にはお子さんがプロジェクトに参加している方もいますが、どちらかというとならぬと教員はプロジェクトを走らせることで精一杯で、コーディネーターには発信はしていますが教員主体でやっているというのが1年目の走らせ方でした。

(委員H)ということは、今後コーディネーターをうまく活用して、教員が走らないで地域と繋げていける方法の将来図や構想はありますか。

(説明員・第六小学校長)そのようになるというところですが、昨年が十分ではなかったので、今年は行程表を作っています。年間の青写真が見えてくると、コーディネーターへのお願いがしやすいのかなというのはあります。総合的な学習の時間なので、必ずしも毎年銭湯にこだわってやるかというところではありませんが、基本的にはいつごろの時期に何をやるかが分かれば、前もってコーディネートしていただくのは可能だと思います。

(委員H)羽衣プロジェクトに限らず、コーディネーターが学習の場にいるということはあるのでしょうか。

(説明員・第六小学校長)授業の中で、子どもと対話をしながら進めていくというものでしたので、どちらかというとならぬと教員の方で組み立てたり下打ち合わせをしたりして、探り探りでした。最後にまさか手ぬぐいの製作までいくとも考えていませんでした。私と担当教員とで話をしていた中で、ギリギリのところでは決まっていたので、コーディネーターに伝えたり、間に挟む余裕はなかったのが現状です。もう少し余裕があると入っていただくことはできると思います。コーディネーターの方には授業などいつでも見に来ていいですよとあってあるので、仕事を持っていない方であれば、一緒になってプロジェクトを進めていくというのも一つの方法として考えられるかとは思いますが、仕事を持っている方が多いので、なかなか日中に学校に来て何かするのは難しいと思います。その辺りがうまく都合がつけばよいのかなとは思っています。

(会長)では、コーディネーターが関わることは可能ではあるということですか。今回はそうしなかったけれど、コーディネーターの生活の状況によっては、プロジェクト立ち上げの頃から継続してというのは難しいとしても、地域との橋渡しがスムーズに行った部分もあると。

(説明員・第六小学校長)そうですね。

(副会長)今の話を伺っていると、コーディネーターが地域との橋渡しをするのではなくて、子どもがそこに行って交渉するということに意味があるのかなと思うんですね。だから先にコーディネーターがある程度地域に話をつけていると、子どもが行けば「はい」と言いますから、子どもがやることに意味があると考えた方がよいと私は思います。

(説明員・第六小学校長)それも一つですね。

(会長)でも、子どもたちが主体的にできるための橋渡しや下ごしらえを結構先生がやっている感じですね。もしそのプロセスに地域の側のお手伝いが入っていたら、と思います。ただ私達の課題は更にそこに「地域学習館」がどう噛むかというこ

となんですね。コーディネーターの手前というか、奥というか。羽衣だと学習館は少し離れていますが、学習等供用施設の羽衣中央会館は近くにありますよね。立川市民科の授業等を進めていく上で、地域学習館や会館が持っている機能や資源を活用してもらえたらよいなという、こちら側からの期待があります。チラシを置く以外で、何かアイデアやご要望はありませんでしょうか。

(説明員・第六小学校長) 羽衣中央会館の管理人はよく知っていて、活用させていただく余地もあったと思いますが、子どもの立場からすると、失礼に聞こえてしまうかもしれないですが、羽衣中央会館は利用するものの、羽衣の子は羽衣の中で動いているので、錦児童館は中々意識しません。遠いので錦図書館の利用もあまりないのかなと思います。もう少しお互いに知らなければいけないのかなというところと、羽衣には児童館はもうできないのですよね。

(事務局・センター長) まちごとに地域学習館があるのが一番良いのですが、そうもいかないのが現状です。今議会で公共施設再編計画の素案が示される予定ですが、中学校区を一つの単位として公共施設の配置をどう考えるかという議論をこれからしていくとすると、羽衣町と錦町は第三中学校区域ですので、羽衣町に新設するというのは難しいと考えられます。

(説明員・第六小学校長) 羽衣学童保育所があるのは児童館ですか。そことコラボレーションすることを考えればよいでしょうか。

(事務局・センター長) そうですね。

(会 長) 連携する場合の主な相談相手は青少健が多いのですか。

(説明員・第六小学校長) 青少健というか、地域学校協働本部事業で地域の重鎮が集まりますので、そこで話をしています。

(会 長) そこにコーディネーターはいるのですか。

(事務局・センター長) います。本部という名前ですが、今のところはコーディネーターと学校との二者連携が現状で、集合体までは中々行っていません。

(説明員・第六小学校長) 羽衣児童館と連携しているかというところでは、星空観測会というのをやっています。

(委員D) 子どもたちの発想を生かして新たな地域の良さを発見していくというのは素晴らしい活動だと感じました。従来の総合的な学習の時間に立川市民科の考え方が加わったことによって、従来の考え方ではない特徴が出されていると感じるところがあれば教えてください。

(説明員・第六小学校長) 総合的な学習の時間の他に、カリキュラムマネジメントとして国語や算数など別の教科の時間も使って行っています。

(委員C) 私もコーディネーターをやっているのですが、地域の範囲が広いので、どこにどういう人材がいるかを人材バンクを作って把握しています。そのようなことは取り組まれていますか。

(説明員・第六小学校長) まだですね。本校では学校からお願いして来ていただく形で、コーディネーターの人材バンクから人材をご紹介いただくというのは数が少ないです。

(会 長) 私達は「地域学習館が持つ資源を学校にどう生かすか」という点は比較的話し

ているのですが、「学校が持つ資源を地域学習館にどう生かすか」ということは簡単ではありませんでした。今回の話の中で、ライブペインティングは子どもだけでなく地域住民の参加も受け入れたわけですよ。子どもたちがそういう発想でやらなければ、地元の人でも銭湯絵師の話聞く機会がなかったというところでは、地元の人にとっても、郷土について学ぶ機会になったのだと思います。このような学習課題の掘り起こしは、学習館にとっても可能性が広がるのではないかと思います。プロジェクトを通して様々なコンテンツを作っているという感じがします。子どもたちに来てもらって発表してもらい、というようなことは、うまく組み込めば可能だったりするのですか。

(説明員・第六小学校長) はい。実際に経験しています。

(会 長) 子どもたちが教える側になり、大人たちが学ぶ側になる、というのは、「学社一体」のイメージとしては新しい切り口でいいですよ。大人は更にそこから深めるかもしれませんし、相互関係が生まれるかもしれません。地域のことをあまり知らない大人もいるので、そういう意味では良い機会だと思います。

(委員E) 間違っていたら訂正願いたいのですが、子どもたちが地域に関わって結果を作り上げていく中で、子どもたちだけではできないことを先生方、コーディネーター、地域学習館などがアシストしていくことになると思いますが、私達のテーマの中に「学校の負担をどう軽減するか」というのがあります。立川市民科では全く新たなことを毎年取り組んでいく形において、先生方の負担が増えて当然というか、増えなければ全く同じことを毎年続けることになるわけで、もちろん先生方にも地域との繋がりができて学校としての力もついていくということは考えられますが、話を聞いていて矛盾というかジレンマを感じていました。

(会 長) 取り組んでいる先生方を見て実際にどうかというのは伺ってみたいですね。

(説明員・第六小学校長) 確かに時間も労力もかかりますが、教員は夢中になっていて、自分自身も探究心というか、総合的な学習の時間は課題を見つけて情報収集し解決するというサイクルを数回まわしていくスタイルなのですが、それと同じように課題解決型でやっていくので、教員の方も面白くなっていくようです。それと、課題解決型の学習をしていくと学力向上に繋がるというデータもあるほか、人間性、心の豊かさにも繋がっていくという意味では、苦労が子どもの成長に繋がる充実感を持っていたのかな、と羽衣プロジェクトを見ていて感じています。

(委員E) 今のお答えを聞いて、「負担」という言葉の定義そのものを違う形で考える必要があると感じました。

(会 長) そうですね。サポートの仕方も変わってきますよね。最後に何かありますか。

(委員K) 直接的に聞きたいと思います。羽衣プロジェクトの中で、負担軽減という意味でコーディネーターや学習館に頼める部分があったかどうか教えてください。

(説明員・第六小学校長) そうですね…コーディネーターにお願いするとしたら…羽衣町にある自動車教習所の感謝祭で、毎年子どもたちがソーラン節を披露する機会があります。今年はそこで先の手ぬぐいの販売をさせていただけるというのがあります。保護者にもお手伝いいただくのですが、そういうところで人手を集める手助けをしていただければ、ということになるでしょうか。

(会 長) まだ聞きたいことがあると思いますが、一旦ここで切らせていただきます。校長先生はありがとうございました。(説明員退席)

(3) 生涯学習施策の進捗評価について

(事務局・管理係長) 前回、担当を決めてコメント案を作成いただきました。資料 4 に記載しています。今回は各コメント案について協議していただければと思っています。資料 5 は 8 月 30 日の教育委員会で承認された「教育委員会点検・評価」の抜粋です。

(会 長) 今日で意見を出し合い、次回の会議で確定させる予定です。ご自身が担当されたシートで、この意見がうまく取り入れられなかったとか、この部分は自信がないというところがあれば自己申告していただくのがよいと思います。それから、自分の担当シート以外で、自分が出した意見が反映されていないとか、この内容を入れてほしいなどがあればご発言いただければと思います。13 名の意見を数行にまとめるのは苦勞されたと思いますので、全部を盛り込むのはできなかったと思いますが、この場で確認すればより充実したコメントになると思います。ランダムにお気づきのところからやっっていこうと思いますが、いかがでしょうか。

(委員 K) お願いと質問の両方があります。私のところだけではないのですが、委員 B が前回少し言っていたかもしれませんが、そもそも昨年度、昨々年度と同じ課題、同じ今後の方向性が記載されているものが結構あります。これでは、評価は本来不能に近いというように個人的に思います。過去の議事録も見て、昨年度も同じ意見があったと思いますが、あえて申し上げます。事業全般が目的で、アウトプットしか書かれておらず、アウトカムが全く書かれていないので、全般的にはこれでは本当は評価ができないと思います。自治体の総合振興計画などであれば普通、5 か年などの実施計画があって、目標があって、課題があって、検討がなされて、事業推進という流れかと思いますが、今どこの過程を進んでいるかが全く分からないので、その辺はどうフォローすればよいのかと審議会委員として思いました。

(会 長) 評価全体のあり方ですね。

(委員 K) そうですね。今の羽衣プロジェクトみたいにちょうどよい取り組みの話をもっと掘ってもらえれば評価も上がるのではないかと思ったりもしました。

(事務局・センター長) 前回、行き違いはありましたが、前年度の意見が活かされていないというところで、確かにこの委員会でいただいた意見は職員には知らしめているのですが、それを具体的にどう取り組んでどう改善したかという部分が非常に弱いと反省しています。今後については、せっかく評価をしていただけるわけですから、それを生かせる取り組みを考えてはいるところなのですが、現実で申し上げますと、年間を通して色々な講座を組んでいく中で、中々反省を生かすチャンスがありません。私は職員に「講座は数を打てばよいというわけではなく、中身を充実させよう」と言っています。プラスアルファ、今後は中身についてもここで出た意見を反映させるような取り組みをする議論の場を持ちたいというのが、今のところの考え方です。



(会 長) これは評価そのものの設計やあり方に関する部分なので、今やっている作業的な部分では解決できないのですが、今は作業を今の枠組みの中で進めるというのと同時に、そもそもどういう評価が望ましいかということ、審議会として事務局や教育委員会に出すということはあると思います。例えばもっと事業内容を詳しく知るといふのであれば、担当職員からもっとヒアリングするとか、委員が分担して事業に参加するとか、色々なやり方がもちろんあると思います。審議会の目的や性格、委員の負担と釣り合うかどうかという議論もしなければなりません、前回副会長からもありましたが、評価を何のためにどうすべきかということだと思えます。

(委員K) 時間的に今年度どうこうしてほしいということではありません。

(会 長) 非常に重要な論点を出していただいたと思いますので、議事録にも取ってもらっていますし、ちょうど次期計画を作る時期にも入りますので、その時には評価のあり方も出していくことが重要かもしれません。ありがとうございます。

(委員D) I-1-①「多様な運営主体による事業の開催」のコメントに「創設10年という節目を迎えた市民推進委員会のあり方も行政からの自立という観点から見直す時期がきている」とありますが、当初からの行政との協働という枠組みを堅持していくことが重要だろうと思っています。それを変えることについては論議が必要だと思います。協働の枠組みの中で、行政には負担をかけているので、市民推進委員会がより力をつけていくという方向で考えなければならないことは多々あるのですが、相互支援のあり方を考える必要があると思っています。

(会 長) 今のご指摘は「自立」という表現を直した方がよいのではないかと、ということでしょうか。

(委員D) より良い協働、ということですね。行政に頼りすぎるのでもなく、かといって完全に自立するというのでもなく。

(委員B) 私の中では、協働は理念なので揺るぎないと思っています。ですが、あり方として、自立というより新たな目指すべきものを提示する時期が来たということですかね。

(会 長) 関係性なり、お互いの立ち位置を見直す必要があるということですね。ただ、「自立」という表現は少し強いのでニュアンスを変えてほしいというご意見が出ました。これを踏まえて手直ししていただけますでしょうか。お願いします。他にありますか。

(委員E) II-1-①「多様な媒体の活用による広報」を担当しました。全面的に“てにをは”をリライトしたいと思います。事務局に修正を送ります。

(委員D) 細かい表現は私も手直ししたい部分がありますが、最終的には事務局により手直ししていただけるのでしょうか。

(事務局・管理係員) 全体のバランスを見て、文意を変えない範囲で少し整えてはいます。

(委員A) 文字の大きさが違うシートがあります。文章のボリュームを調整すべきでしょうか。

(会 長) コンパクトにまとめてくださった方と、ボリュームがある方とそれぞれですが、少し目安を作りますか。実は、コンパクトすぎる方には事前に書き足しを依頼し

ています。

(委員C) Ⅲ-2-①「コーディネーターとしての職員の養成、研修体制の強化」も書き直しました。職員だけに負担をかけるのではなく、自分たちもやらなければいけないことがあるだろうという思いで、実際にやっていることを書いていました。市民も協働して一緒に研修を受けて、学習館や学習等供用施設にコーディネーターとして入れるような計画を立てるのが良いのではないかという思いでしたが、委員Gが担当されたⅢ-1-①「地域人材の把握・育成・ネットワークの構築」の内容に近いのではないかと、ということなので書き直しましたが、あまり気に入っていません。

(会 長) 内容に重なりがあったので、交通整理しようと思って修正を依頼していました。大事なことは何度も出てきてよいと思いますが、Ⅲ-1-①に委員Cが書いていたことを付け足してもよいのではないかと、委員Gにも相談していました。

(委員G) 委員Cと直接話し合いました。

(委員C) それぞれ自分の思いで書いているので、調整は会長にしてもらえばよいという話になりました。ただ私も責任があるので、書き直す前が一番良いと思いながらも、どうしたら職員の養成や研修体制の強化ができるのかということで書き直しました。

(委員G) 委員Cは行政を手伝おうという気持ちがすごくある方で、かつ先駆者なので思いが強いのだと思います。

(会 長) 委員Cのご指摘はすごく大事なことで、市民が協働する力をつけていくということと、市民が生涯学習の支え手になっていくということはとても大切だと思います。ただ、それで職員がいらないということではありません。

(委員C) 職員がいらないということではなくて、職員ばかりに負担や責任を、というのではなく、一緒にやるべきだと。そのために養成講座を開けばよいと。

(会 長) 委員Cのご意見は市民の側に強めに出ていて、読み方によっては職員がいらないとも読めるような感じだったように思います。市民が力をつけていくことと、職員が力をつけていくことを、両方大事だとすべきだと思いました。

(委員C) 両方大事なことです。そのつもりで書いていました。

(副会長) 書き直し後のコメント案に何か書き足せばよいのではないのでしょうか。

(会 長) 市民の側について記載されていた部分をかなり削っていただけてしまいましたからね。一緒の場で学ぶという視点はすごく大事だと思います。そのご意見を生かしながら職員の力をつけてほしい、という内容にしたかったのですが…そしてⅢ-1-①に市民の人材を掘り起こして育成することを強調するのが大事だと思ったのですが…

(委員C) やはり、資格取得制度が立川市にないということも今の世の中では少し遅いなと思う気もしますし、そういうことも市が考えていかなければならないことだろうという意見を書き直し後に採り入れました。社会教育主事を置くことにもなっていないし、そこは改革が必要ですね。

(委員E) 削られたというご意見はⅢ-1-①に入れてあるのですか。

(委員G) 入れていません。私か書いたもののままです。

- (委員C) 言葉で説明すると書いたときの気持ちが分かるかもしれませんが、文章に残るといことは記録されるということですから、どうすべきかを委員Gと話して、自分の思いで書いたのだからそれはそれでよいのではないかと、ということと、私の思いは思いで、市民も職員を待っているだけではなくそういうレベルに達しないといけないと。職員が必要ではないということではありません。
- (委員B) 元に戻すのはいかがですか。
- (委員D) ここは自分の意見を書くところではなくて、皆さんの意見をまとめるということだったと思います。
- (委員C) 各意見を読み取りながら書いた上で、総評としてこうあるべきだという思いと、実際にこれから活動していくのであればそういう方法も必要ではないかと。
- (委員D) 委員Cがおっしゃった職員と市民の研修を共同で行うということは大切だと思いますので、Ⅲ-2-①に入れるかどうかは別ですが、記載する必要はあると思います。
- (委員B) 市民と共に学ぶという思想はあってよいと思います。
- (会 長) 書き直していただいた文章も大事な内容だと思っていますので、市民と共に学ぶという部分を足すというのはどうでしょうか。
- (委員C) そのようなことを文末に書いたはずですが。一般市民との協働という形で。
- (会 長) 分量のことでいうと、Ⅲ-1-①やⅢ-1-②がやや少なめではあります。
- (委員K) どれくらい掘るべきかが分かりませんでした。私が担当したⅢ-1-②とⅠ-3-①とでは深度がかなり違うので、ご指示があれば修正します。
- (会 長) 各委員の意見を探り入れつつ、それぞれのシートで担当者の経験や興味に応じて深めているというところがあるので、追加してほしいことがあればここで言うていただくと深まっていくのかなと思います。
- (委員D) 私が担当したⅠ-3-①「参加しやすいしくみづくりの推進」についてですが、副会長のご意見で「市民に“実践者”になることを求めるのは酷」というのがありました。私は性急に繋げてはいけないと考えますが、それでよいでしょうか。
- (会 長) コメント案にある「講座の成果や受講者のまちづくりへの参画を性急に求めることはするべきではありません」という部分ですね。
- (副会長) 講座をある程度受講してもらうことは意味があることだと思っています。その中からできる人が出てくればよいという考えです。なので、委員Dの表現は素晴らしいと思います。
- (会 長) その次に「まちづくりに繋げていく意欲を高めるコーディネーターの関わりや養成が必要」とありますからね。性急に繋げてはいけないが醸成はしていくと。
- (副会長) 委員CのⅢ-2-①の最後の部分も、これでは弱いと思います。一緒に研修を受けることに意味があるのだ」ということを加えるとよいと思ったのですが。
- (委員C) 加えてください。
- (副会長) ただ、そのようなことが市として実際に可能なのですか。
- (会 長) 研修の対象を広げるということは不可能ではないのではないのでしょうか。
- (事務局・センター長) 学びながら行政の立場と市民の立場で違いがあったりしますので、お互い学びあうことはよいことだと思っています。

(会 長) では、Ⅲ-2-①の最後の部分に足しましょう。

(委員 A) 東京都公民館連絡協議会で色々な研修が開催されていますが、市民と職員が参加した研修では、受け取り方が職員サイドと市民サイドで違うということがよくあります。そこで話し合いをすると「そうだったのか」ということがよく出てきますので、市民と学ぶ、市民同士も学ぶ、市民と職員も学びあうということが、Ⅲ-2-①にも明確に書かれたらよりよいのではないかと私も思います。

(会 長) 研修の質を高めるということにも繋がるということですね。

(副会長) 市民と共に研修をして、専門性を高める。

(会 長) 委員 K のⅢ-1-②はどうしますか。追加などご意見があればお願いします。

(委員 K) 皆さんの意見を民主主義的にまとめています。

(委員 D) 「単純な『取組み』で終わらせることなく、児童の理解度や保護者の意見なども踏まえた分析を行うべきだと考えます」という部分で、どうしても学校の報告というのはこういうことをやりましたという実践報告になりがちで、その後の自己評価が苦手なのかなと思います。委員 I はその点はどのようにお考えですか。

(委員 I) 本当は第六小学校長がいるときに言うべきだったのですが、立川が教育長肝煎りで市民科に目を向けたことが大成功の一つだろうと思います。総合的な学習の時間の中でやるべきことの一つとして、自分の身近な課題、といったところでいうと、第六小学校の各学年の事例には「地域の一員としての自覚を高めさせ、地域に貢献しようとする態度を育てる」という共通したキーワードがあるようです。つまり教育長が立川の子どもたちの課題がこうだと捉えたわけですね。だから立川市民科という教材を通して子どもたちに身につけさせようという願いで発案されたのだろうなど。その時に授業自体は総合的な学習の時間でやりなさいと。ただ総合的な学習の時間はこれまでの実績がありますから、急にやれと言われてもというのがあるので、教科横断的な取り上げ方をして実践しているという話だと思うんですね。だから、もしかしたらこれから何かやろうとする時のアプローチの一つとしての重要なアイテムとして捉えてよいのかなという気がします。学校側からも地域側からも、色々やれる部分があると思います。

それと、先ほど「負担」という発言がありましたが、実はこういうことに関して教員は全く負担を感じません。何しろ、子どもたちにこういう力をつけさせたいという狙いがある、そのために何をすればよいのかということの延長線上にある活動があるということであれば、どんなに時間がかかろうが、どんなに大変であろうが全く負担は感じません。要するに教員が一番負担に感じるのは「なぜこれを学校や先生がやらなければいけないのか」ということをやらされることです。やることははっきりしていて、子どもにつけさせなければいけない力があることを教員が感じて、それをなんとかしようということには全く負担がないので先ほどのような話が成立するんです。立川市民科に取り組んでいるということが、もしかしたらものすごい財産をこれから作っていく可能性があるかなと思います。そこに学校だけでなく地域がどう絡んでいくかということは検討する価値があるのかなと思います。

(会 長) では、Ⅲ-1-②のところ「こういう点が評価できる」とか「こういう部分が

良い着眼点だ」ということを、今日の議論を踏まえて追加していただいて、「地域の一員として育てる」という子どもへの狙いは大人にも重なりますから、生涯学習の立川市民科の方でもこんな発展性があるとか、少し膨らませていただくと深掘りできるかもしれません。

(委員 I) 総合的な学習の時間は、入ってきて 20 年くらい経ちますが、私が教員の時代に、子どもたちは自分のまちのことをごみで汚いから嫌いだと言っていました。そこで、どうやったら子どもたちが自分のまちを好きになるかという学習計画を作りました。羽衣の子たちは銭湯も自分たちのまちも好きになるし、協力してくれた大人も好きになりますよね。切り口としては新しいわけではありませんが、市教育委員会として学校を挙げて取り組んでいることは素晴らしいと思います。

(会 長) 「立川市民科」とうたうことで、色々な要点が分かりやすくラベリングされているので、ピックアップする価値はありそうですね。

(委員 C) 生ごみのリサイクル事業に自治会が参画しているのですが、学校が「ごみの研修を子どもたちに受けさせたい」と言ってきました。そこで、自治会も応援に入っごみの勉強会をやりました。子どもたちが描いたポスターをまちの掲示板に貼ってもらったところ、ごみが散らからなくなったんです。

(会 長) 子どもから言われると大人は考えさせられますね。相互効果がありますよね。学校の教育課程だけでなく、まちづくり、地域づくり、繋がりづくりとしてよいと思います。

(委員 D) III-1-②のコメント案の表現で気になるところがあります。「事業の内容や効果測定の記事がありません」とありますが、事業の内容の記事がないということは考えられないと思います。「立川の教育」などの資料にそれなりの記事があると思います。それから「単純な『取組み』」とありますが、それなりの効果を狙って努力しているはずですから、あなたのやっている教育活動は単純だと言うと反発されるかなと思います。それから「児童の理解度や保護者の意見なども踏まえた分析を行うべきだと考えます」とありますが、理解度を分析しないで行っている教育活動は一つもないと思います。それから「若年層や勤労世代を取り込むことに固執し」の「固執する」ですが、もし固執する人がいたらそれはそれで素晴らしいと思いますが、現実には固執する人は一人もいないと私は思っています。若年層や勤労世代を取り込むことは課題ですが、中々取り込めないのが現状で、少しでも参加していただくというのが大事だと思っています。

(会 長) 全体的に表現を修正したいということですね。

(委員 K) 誤解を招く表現を使ったことはお詫び申し上げます。ただ、私が言いたいのは、平成 29 年度の取組状況と書いてあるのに、この資料から読み取れることが何もないのです。そこを先に申し上げたのです。前段があつてこの資料が出てきてという流れであれば、もう少し表現が変わりますし、おっしゃったような意味合いではありません。あと、「固執」という表現については、昨年にも同様の表現が使用されていたはずですが、若年層等の参加について事務局から今後の方向性が示されておらず保留になっていたのもう一度補足させていただいたという経緯があります。

(会 長) 若年層や勤労世代の参加が少ないことは課題ですので、それに働きかけることはやっていただきたいですが、それだけになってはいけないということを両論併記できるようにしたいですね。

(委員K) 私も取り組まれていないとは思っていませんが、取組状況はここからだと思いません。私もそうでしたが、市民の方が見るのはここだけだと思います。ここだけ見るとやっていないように見えてしまうので、ちゃんと書くべきだということを前段で申し上げています。皆さん、銭湯の話など知りませんでしたよね。

(事務局・センター長) 「生涯学習における立川市民科」は、先ほど発表いただいた「学校教育における立川市民科」ではありません。実は「生涯学習における立川市民科」は、学校のものほど進んでいません。もっと前段の、地域を知るとか、スキルアップを図るなどの単独のものになっています。「児童の理解度や保護者の意見なども踏まえた分析」に繋げるのは、生涯学習の領域でやっているものなので少し違和感があります。事務局としても確認が甘く申し訳ありません。

(会 長) 今日せっかく「学校教育における立川市民科」について学び、しかも結構良い取り組みであると知れたので、学校の方ではこのように展開してこんなに良いことがあるのに、生涯学習の方ではまだ熟していないということを書いていくのはいかがでしょうか。

(委員K) 委員Iがおっしゃったことがすべてだと思います。

(会 長) それを書いていただいて、生涯学習の方も学校みたいに成熟させてほしいという内容にしてください。

(副会長) 私の感覚としては、「立川市民科」としては取り組んでいないようにみえても、例えば地域を知ろうという講座は現実に色々あって、結構人も集まっています。それが「立川市民科」としてまとまっていないことだけなのではと感じます。

(会 長) 実態としては地域を学ぶ事業が行われているけれど、体系づけられたり関連付けられたりというのが不十分だということですね。

(副会長) 学ぶ講座を「立川市民科」とまとめれば、「立川市民科」としては色々なことをやっているということになります。ただそうした方がよいのかどうかは少し疑問があったりもします。

(委員D) 市民推進委員会の講座では、地域学習に関する講座は「立川市民科」としてやることになっています。ただ、市民推進委員が「立川市民科」を理解できているかという疑問があります。

(会 長) 色々なレベルや段階があることも事実ですよ。委員Kが言われたように、この資料から読み取れることと、生涯学習推進審議会委員としてはその背後から読み取らないといけないことがあって、資料だけから読み取ればよいというわけではありませんが、しかし情報は今これしかありません。そのような状況の中で、「立川市民科」については生涯学習での位置づけが明確でないものの、学校教育においては進んだ取り組みもある、ということ踏まえて書いていただくのがよいと思います。

(副会長) 「固執」の部分は、「若年層や勤労世代を取り込むことは課題ですが」という形にしたらよいと思います。

(会 長) では、それで行きましょう。

(委員 B) 先ほどのⅠ-1-①の「行政からの自立」を「行政との『よりよい協働』」に変更をお願いします。

(委員 F) Ⅰ-3-②「学びに関わる市民や組織の連携と調整」はこれでよいでしょうか。一番伝えたいのは、他の団体の情報が来ないということです。事務局により整理して提示してもらいたいというように強調して入れました。

(会 長) 一度修正をお願いした結果、具体的に記載していただいているのでよいと思います。連携を進める上で情報共有していく必要があるのではないかとということが示されていて、分かりやすいと思います。

(委員 E) 文体を事務局により統一してください。

(事務局・管理係員) 分かりました。

(委員 G) 昨年度はそこまで長いコメントを書いていなかったのですが、Ⅲ-1-①はその程度の量で皆の意見をまとめたつもりでしたが、それが短いとなると、どうすればよいのでしょうか。Ⅲ-2-①のところでは話があった委員 C のご意見も入れていませんが、長いのもどうなのかという気がしなくもありません。

(会 長) 中身が大事ですので、文章量はあまり気にしなくてもよいと思います。市民の力を活用する方向で取り組まれていて、今後は支える側としても活躍してほしいという市民への期待は大きいので、人材の発掘と育成はとても大事なことだと思います。

それでは、コメント案については、今回の議論を踏まえて書き直したい、追加したいという方は、修正したものを9月21日(金)までに事務局に提出してください。このままでよいという場合はそれで結構です。最終的には正副会長と事務局で目を通しますので、そこで気になる部分は個別に相談させていただく可能性はあります。次回は最終確認ができればよいと思っています。

#### (4) 第6次生涯学習推進計画策定に関する市民アンケート調査について

(事務局・管理係長) 資料6と資料7をご覧ください。次期計画策定のために、市民の学びに関する課題と現状を把握するアンケートをとる予定です。10月2日(火)から10月31日(水)までの期間で、18歳以上の市民2,000名を無作為抽出し、無記名でご回答いただきます。5年前に同様のアンケートを行っていて、経年変化を統計的に把握したいので、基本的には前回と同じ調査内容とさせていただきたいと思っています。資料6はその案です。追加したい質問があればご意見をいただければと思います。調査結果は1月の第6回会議で報告する予定です。第6回からは次期計画策定の協議に入りたいと思っています。

(会 長) 基本的には5年前の設問と同じとし、比較するという事です。設問は国の調査ともそれほど変わらないベーシックな実態調査に、立川市の個別状況を少し聞いているという内容となっています。大分練られた中身だと思いますが、追加したい項目はありますか。

(委員 A) 市民が生涯学習によって身に付けたものを生かして起業したいという人の話を耳にしました。そういう方に対して行政が支援する仕組みがあるかと聞かれまし

た。市民が見に付けたものを行政を通さずに自らの力で実施していくときに、それを支援する仕組みがあるのでしょうか。このアンケートでそれを問う必要はないと思いますが、そういうことを求める方もいるということ想定しながらやるとよいと思います。

(事務局・センター長) 現状、仕組みとしてはないですね。

(委員 A) どの自治体でもないようです。その方からは「行政は当てにならないので自分でやる」と言われました。なおかつその方は自らお金を出して研修に行っていて、自分に出資したお金をなぜボランティアで行政に提供しなければならないのかとも言っていました。そう感じる人はこれから出てくると思います。

(会 長) 今の政権だと、学び直しを経済的な側面に繋げることを強調しているので、そうすると生涯学習を新しい仕事に活かすということが増える可能性はあります。今回立川市が実施するアンケートは、教育委員会の中での成果と活用という視点ですが、新しい時代の生涯学習を考える上では、一つの観点として重要なご意見だと思います。

(委員 D) 立川市民科に関わる地域学習などの回答項目を増やすのはいかがでしょうか。資料 6 の 4 番目の質問に対する回答項目の②の括弧の中に入れてはどうでしょうか。それから、10 番目の質問に対する回答項目の⑩に、メールマガジンとホームページを追加するのはいかがでしょうか。

(会 長) 回答項目の内容が変わると比較ができなくなりますので、今後の課題ですね。

(委員 I) アンケートの内容は簡単にやっては駄目だと思います。このタイミングで出してきて検討してくださいというのはおかしいと思います。アンケートはデリケートなものですから、修正するのはやめた方がよいと思います。

(副会長) 前回調査の回答率が約 30%とのことですが、これは妥当な数でしょうか。

(事務局・管理係員) そうですね。他のアンケートでも概ね 30%前後のようです。

(会 長) それでは、委員 I のご指摘もありましたように、そう簡単に修正すべきものではありませんので、5 年前と同じ項目でやっていただくということでご承認いただければと思います。

#### 4. その他